

当院僧侶、鈴木琉清師が新聞に掲載されました

文化時報 令和4年6月24日号に掲載されました

取材ノートから
山根 陽一

セカンドキャリアに僧職



僧侶になったのか。自問自答した。

サラリーマン時代は部下にとっても厳しい上司で「むやみにつらくあたることもあった」と振り返る。「そんな私を支えてくれたのは、実は部下たちだった。それに気付いてから感返しがしたいという気持ちが芽生え、仏門を志した。残りの人生は人のために生きよう。そう考えていたのだという。

初めに返った後、見性院に入り得度。しばらくして永平寺東京別院で厳しい修行を自らに課した。70歳になっていた。

今では橋本住職の片腕として見性院を支える一人だ。自己資金を投入し建立した見性院別院観音堂の隣に雑居を構えて、忙しい日々を送っている。当初は反対した妻と娘も、千葉県の実家に帰ると笑顔で迎えてくれるという。

職し、僧侶への転身を目標とした。「55歳を過ぎた頃から御詠歌の集いに接する機会があり、経文に興味を持ち始めた。退職後は通信教育を活用し僧侶の資格を取得。派遣僧として働いた。だが、葬式の時だけお経を唱えてすぐに帰ってしまう、経済効率のみを追求したスタイルに疑問を持ち始めた。何のために

人生100年時代といわれている。平均寿命が100歳になるのはかなり先だろうが「人間五十年」と叫んだ織田信長の時代から見ると、とんでもない変化である。

退職後のセカンドキャリアを模索する50〜60代は多い。それまでの職歴を生かす人もいれば、全く異なる新天地に飛び込む人もいる。老後の生活設計に年金だけでは心もとないという人もいるだろう。私のように

第二の人生に仏道を選んだ大先輩がいる。曹洞宗見性院（橋本英樹住職、埼玉県熊谷市）の鈴木琉清副住職（77）。大学卒業後35年以上勤め上げた大手電機メーカー系列企業を59歳で退職し、僧侶への転身を目標とした。

「本当の意味で僧侶になれているとは思っていない。少しでもお釈迦様に近い存在になれるよう日々を生きるのみを願う。自分の人生が100年続くか。終わってみなければ分からない。でも、100年続くつもりでいると明日は少し明るくなる。大先輩から教えられた気がする。（やまね・まづいち）

鈴木琉清副住職

合掌

令和4年6月24日

見性院住職